研　究

ふるさとの偉人『勤王の歌人中山三屋女』補遺

会員　田村悌夫

一昨年（平成十六年五月八日）、新南陽公民館で、旧新南陽市が平成十三年度から実施してきた「ふるさとの偉人調査研究事業」の報告会が開催された。この事業は、ふるさとの歴史を振り返り、ゆかりの人物の業績を市民グループにより後世に伝え、その情熱・英知を現代に活かす趣旨で実施されたものである。

当日、選ばれた三人の偉人が、「勤王の歌人中山三屋女」・「四熊宗庵」・「若き日の岩崎民平先生とその業績」という題名となり、これらをまとめたものが一冊の本（事業報告書）として出版され発表された。

わたしは中山三屋女グループを代表して「勤王の歌人中山三屋女」の執筆をしたが、発表後、新たな資料・情報の入手や提供があったので、これに追加・補正をしておきたい。

一、高崎正風から矢嶋作郎宛の手紙

中山三屋女グループの一員であった高原信正氏から、新たに高崎正風から矢嶋作郎に宛てた手紙が、届けられたので紹介する。

三屋女と矢嶋作郎・高崎正風の関係は、明治四十年（一九〇七）十月（没後三十六年）に矢嶋作郎が三屋女の歌集『浮木（うきぎ）の亀（かめ）』を出版したが、その歌集の序文を書いたのが、当時の歌の最高権威者で御歌所長であった高崎正風（註一）という関係である。

高崎正風

矢嶋作郎

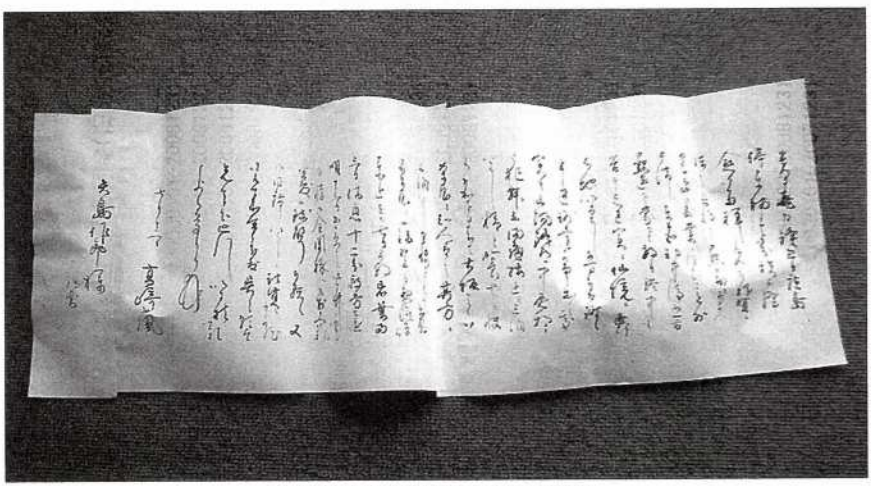
高崎は三屋女とは旧知の間柄で、彼女が七歳のとき、京のさる家の歌会で出会い、彼女の非凡な才能を見抜いた。慶応三年（一八六七）、京都留守居役の高崎が薩摩へ下るとき、京都嵐山の送別会に三屋女を招待している。

手紙の内容

発信日　明治三十九年（一九〇六）七月十二日
発信者　相模國三浦郡葉山村字堀内　高崎正風
受信者　周防國下松町　矢島作郎宛－親展－

貴御書華拝読過日廣島
停車場にて萬祝被降
愈御多祥被為入奉拝賀候
陳は過般は懇命にあまへ
宮島御別業に伺ひ意外
長滞在に成初中後不一方
御懇遇を蒙り数日艦中の
苦を忘れ実に仙境に遊ひ候
心地いたし千万奉拝謝候

早速謝毫可差出候處
実は山陽鐵道中暑期に
被犯舞子陽亀樓上に三泊
いたし精々加養やゝ快
く相成をまちて大坂天下
茶屋に知人有之其方に
三泊いたし全快をえて出發
名古屋に一泊翌日夜汽車にて
東上去る七日早朝着葉両
三日休息十二分疲勞を癒し
明十三日出京の心算に御坐候
乍憚御令閨様へも別文御礼
宣敷御致聲奉願候又
御同席いたし候諸賢へも可然
御取成置被下度呉々願上候
先は乍延引いすれ御礼
申上候尊拝
七月十二日　高崎正風



矢嶋作郎宛高崎正風の手紙（複写）

矢島作郎様

侍曹

手紙の日付からすると、歌集の序文の日付がこの手紙の一年後の「明治四十年初夏」であるので、矢嶋作郎が宮島の別荘に高崎正風を招待して、歌集の序文の依頼をしたのではないかと思われる。

手紙の内容は、宮島の別荘では日頃の苦労を忘れて仙境に遊んだ気持ちになるほどのもてなしを受けたことに感謝するとともに、広島駅で見送りを受けた高崎は、途中山陽鉄道に乗って帰るとき、あまりの暑さに体調を崩し舞子で降りて三泊し、その後大坂で三泊、名古屋に一泊して葉山に帰ったので、心配した矢嶋が手紙を出したのに対する返礼である。このとき矢嶋六十八歳、高崎七十一歳である。この手紙から二人の親密さが読み取れる。

（註一）高崎正風―天保七年（一八三六）～明治四五年（一九一二）・明治時代の歌人、枢密顧問官。薩摩藩士。若くして学を好み、八田知紀について歌を学ぶ。維新の際、国事に奔走して功があった。明治二一年（一八八八）御歌所設置によって御歌所長となり、明治四五年まで長期に及んで勤めた。歌風は桂園派の流れを汲み、典雅・平淡で多くは題詠により、いわゆる旧派の代表的歌人として重きをなした。明治天皇の厖大な作のほとんどは彼が点したものである。歌集『たづがね集』、遠山稲子筆記の『歌ものがたり』などがある。明治四五年二月二八日没。七七歳。

勤王の歌人中山三屋女

二、柳井における三屋女の歌

わたしは『勤王の歌人中山三屋女』の執筆にあたり、県内の三屋女ゆかりの地を訪ね、そこで彼女が詠んだ歌を紹介したが、この度、柳井も訪ねていて歌を詠んでいることが、『谷林博遺稿集』により判明したので追加しておきたい。

それによると、当時柳井には三屋女の歌友として岩政隣徳、東条大二、河井育次郎、医師浅海鳳石、余田の正蓮寺の住職などがいた。岩政隣徳を訪ねたときの作歌として、次の歌が記載されている。

くれのこる日数はいまだ有明の
　月もかすみてはるは来りて

隣徳は「明治百人一首」に載った歌人であったというから、かなり知られた歌人であったのであろう。

なお遺稿集には、大田垣連月の三屋女追悼の歌も記載されているので紹介する。

おもひきや八十あまり永らへて
　きみがむなしきあととはむとは

三、二つある中山神社

勤王の歌人中山三屋女は、明治天皇の外祖父、大納言中山忠能を父とし、中山忠光は異母弟である。中山忠光は豊浦郡田耕（たすき）村（現下関市）で、もてあました豊浦藩の衣類方により手を下されたが、その遺体は村人によって田耕村から下関綾羅木海岸に運ばれ、そこで埋葬された。そのため綾羅木に中山神社が建立された。

しかしその後、暗殺された田耕にも中山神社が建立されている。これは『豊北町史』によると、維新の夜明けが訪れるとともに、田耕の人々の心には、「侍従公（註二）に申訳ない」という気持が強くはたらいたようで、幾多の神秘めいた話が伝えられているが、大正元年（一九一二）十二月五日、村民有志が五十年祭を挙行した際に建碑し、さらに昭和六年（一九三一）「中山忠光朝臣遭難之処」の石碑を建て、霊を祀り遺跡とした。また田耕神社

内に中山神社を祀って礼拝をしていたが、昭和三十八年（一九六三）に忠光遭難の地に神社を建立して、「本宮中山神社」と名付けたのである。

したがって「中山神社」は、田耕のある豊北町が下関市と合併した現在では、下関市内に二つあることになるが、それぞれについて説明しておきたい。

（註二）忠光は明治天皇が幼少時、侍従であったので、「侍従公」と呼ばれた。

中山忠光

①綾羅木の中山神社

綾羅木の中山神社は正式には、「長門国北浦総社中山神社」で、御祭神は正殿は中山忠光朝臣命、左殿明治天皇、右殿天照皇大神である。

左右に明治天皇と天照皇大神が祀られているのは、平成七年（一九九五）の忠光朝臣命生誕百五十年に当り、忠光朝臣命の甥に当る、明治天皇と皇室の御祖先に坐す、天照皇大神の二神を配神に奉祀したからということである。

この神社は慶応元年（一八六五）十一月に豊浦藩によって「中山社」として創立された。その後「招魂社」となったが、昭和三年（一九二八）五月十八日、社号を「中山神社」と改め県社に列せられている。

同神社の案内書の御由緒には、次のように書かれている。

御由緒

御祭神中山忠光朝臣命は、弘化二年（一八四五年）に、

綾羅木の中山神社

大納言中山忠能卿の第五子に生れ、明治天皇の御生母中山一位の局(慶子)は姉君であり、従って忠光朝臣命は明治天皇の叔父にあたる。

忠光朝臣命は公卿には珍らしく筋骨たくましい偉丈夫であり、父忠能卿の御薫陶を受けて、ひたすら国事を憂い、幕末動乱の時代にあって最も急進的な青年公卿として尊皇討幕にその生涯を賭けられたのであった。

当時朝廷は、尊攘派と公武合体派とにわかれていたが、やがて三条實美公をリーダーとする尊攘派が勢を得て、ついに文久三年(一八六三年)八月十三日孝明天皇の大和行幸の詔(みことのり)が下されたのであった。

天皇の攘夷親征が決まった事によって、一部急進尊攘の志士等三十余名は、天忠組を結成し、忠光朝臣命を主導として八月十七日の討幕の挙兵を奈良県五條市にておこしたのである。

ところが、十八日には公武合体派の公卿たちと会津・薩摩両藩の画策によりクーデーターが成功し、朝議は一変して、孝明天皇の大和行幸はとりやめとなり、尊攘派

にくみしていた長州藩は、堺町内の守衛を差しとめられ、三条實美公以下七卿は、長州へ落ちのびられた。これが七卿落ちといわれる政変である。

このため、大和にあった忠光朝臣命以下天忠組の義軍も、この政変で名分を失い、朝敵の汚名を受けることになって孤立した。やがて彦根・紀州の幕軍に攻められて壊滅したが、忠光朝臣命外数名は死地を危く脱し、長州藩に難を逃れたのであった。これが、いわゆる天忠組の義挙と言われる事件である。

このころ、長州藩は本・支藩ともに俗論党の勢が強くなり、忠光朝臣命の身辺も次第に危くなってきたため山陰を転々とされたが、元治元年（一八六四年）十一月八日の夜俗論党の凶手にかかって、十九才と六ヶ月の短い波瀾の生涯を断ちきられたのであった。

高杉晋作が、長府の功山寺に回天の兵をあげたのはわずか三十七日後の十二月十五日のことである。

やがて世があらたまり、回天の義挙が成ると、奇兵隊らの手によって新たに松の角材の墓標が設けられ、慶応元年（一八六五年）十一月長州藩（豊浦藩）は墳墓の上に社殿を建て「中山社」と称し、中山忠光朝臣命の英霊の鎮魂をひたすら祈ったのであった。これが中山神社創立の由来である。

同社境内にある中山忠光朝臣命の辞世碑の歌は、周南市出身の末次信正海軍大将の筆跡である。

中山忠光卿辞世

思ひきや野田の案山子の梓弓
引きも放たで朽ちはつるとは

この綾羅木の中山神社には、境内摂社として愛新覺羅浩命・愛新覺羅溥傑命・愛新覺慧生命の愛新覺羅家の三柱を御祭神とする愛新覺羅社がある。この社殿は昭和六十三年（一九八八）一月十七日に造営され、大陸に向い日中両国の友好を永遠に念じている。

②田耕の中山神社

田耕の中山神社

田耕の中山神社は白滝山登山口にあり、八本の柱に支えられた吾妻屋風の建物(正式な社殿ではない)で、正面の門前には「本宮中山神社」と書かれている。

これは地元の田耕神社が管理しているが、正面入り口右側の説明板には、次のように書かれている。

説明板

中山忠光は明治天皇母方のおじに当り文久三年天忠組の主将として勤王の兵を大和五条に挙げたが戦利あらず、長州に逃れ転々として居を移し、元治元年七月上畑の常光庵に入ったが、時あたかも、下関海峡に四ヶ国連合艦隊の砲撃があり熱血漢の忠光は再びここを飛び出した。

その後黒井村の庄屋宅、川棚、三恵寺、室津観音院などを転々として潜居、同年八月下旬田耕白滝山山麓の大田(新左衛門)宅に約二十日間滞在したといわれる。この時期に至り長州藩では卿を匿まうことは幕府を敵視することになるとして幕命どおり成行に任すことを決した。

十月中旬頃卿を四恩寺に移そうとしたが果さず同部落の大林(万次郎)宅に潜伏せしめたが、当時萩藩は、俗論党が藩政を掌り一方長州藩の隠謀も進行して田耕に刺客が潜入してきたため再び大田宅に移した。

十一月五日卿は身辺に危機が迫っていることを知らされ、四恩寺に避難しょうとして途中長瀬の渓谷で殺害された。

時に忠光卿は二十才であった。昭和三十八年十月、豊北町では忠光卿の百年祭を記念して同地に中山神社を建立した。

豊北町
豊北町観光協会

この田耕の中山神社の建物の北側には、「中山忠光朝臣遭難之處」と書かれた碑が立てられていて、その下に小さな「血染の岩」が置いてある。

そのほか境内には綾羅木の中山神社と同じく忠光の辞世の歌碑があるが、それ以外にも三笠宮殿下・妃殿下(もみじ-平成五年四月二九日)や嵯峨公元御夫妻(サザンカ-昭和五〇年二月一五日)同じく愛新覺羅御夫妻(くすの木-前記に同日)のそれぞれ記念植樹がある。

本宮中山神社の建物の壁に中山忠光を中心とする家系図が掲げてあるので、付録として末尾に記載する。

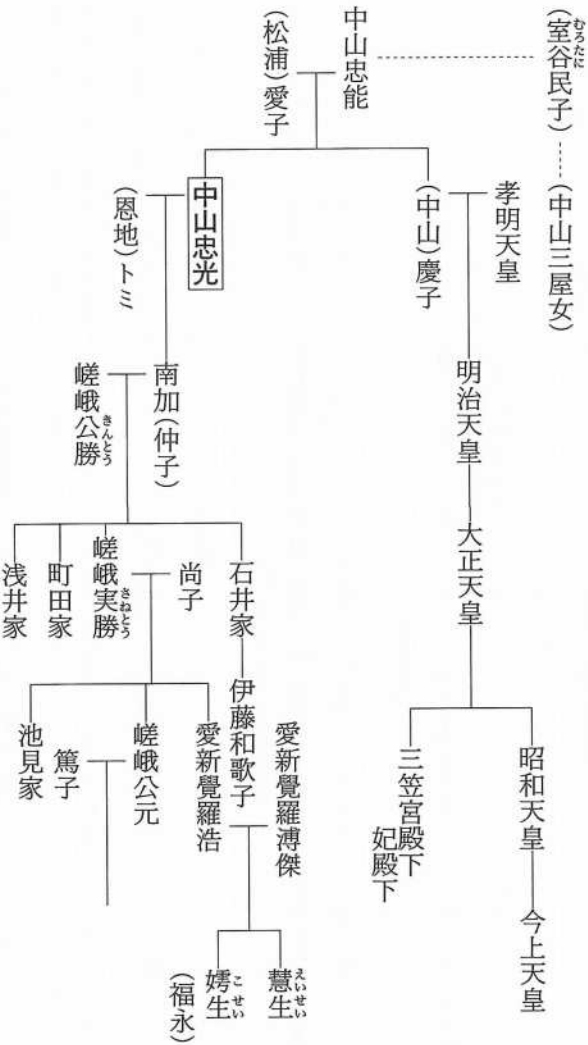
四、その他

執筆にあたり、校正には充分気を配ったつもりであったが、一件校正ミスが発見されたので、左記の通り訂正させていただきたい。

六二頁　八行目　(誤)文政元年(一八一八)
　　(正)文化元年(一八〇四)

参考資料
『谷林博遺稿集』谷林チサト編　昭和六二年　私家版
『豊北町史』豊北町史編纂委員会　昭和四七年　豊北町
『国史大辞典』国史大辞典編纂委員会昭和六三年
吉川弘文館

付録
中山忠光卿家系図


（室谷民子）……（中山三屋女）
中山忠能
（松浦）愛子
中山忠光
（恩地）トミ
嵯峨公勝
南加（仲子）
嵯峨実勝
尚子
浅井家
町田家
池見家
篤子
嵯峨公元
石井家
伊藤和歌子
愛新覺羅浩
愛新覺羅溥傑
嫮生
（福永）
慧生
孝明天皇
（中山）慶子
明治天皇
大正天皇
三笠宮殿下
妃殿下
昭和天皇
今上天皇